

- \*パウロはエペソ人への手紙をローマの獄中から書いていると思われるが、自身を「キリストの囚人」と呼び、キリストのしもべであり、キリストに囚われてキリストを伝える者であることをはっきりと言明している。その彼が「この奥義は啓示によって知らされたのです。」(エペソ3:3)という。「啓示」とは、神が直接的に、或いは超自然的な方法で知らされること。「奥義」とは、「隠された真理」のこと。
- \*「その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。」(エペソ3:6)パウロの受けた奥義とは、異邦人もユダヤ人もなく、全ての人が神の国の相続人となり、神の家族としてキリストのもとに一つとなり、聖霊を受けて、神の住まいに住み続けるようになる、ということである。
- \*「私は、神の力の働きにより、自分に与えられた神の恵みの賜物によって、この福音に仕える者とされました。すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に、この恵みが与えられたのは、私がキリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝え、また、万物を創造した神のうちに世々隠されていた奥義の実現が何であるかを、明らかにするためです。」(エペソ3:7~9)「奥義」を神から知らされたパウロは福音に仕える者となった。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」(マルコ16:15)福音宣教はイエス・キリストの命令であるが、神から与えられた賜物を用いて、自分の力ではなく神の力に頼って福音を宣べ伝えることである。福音を伝えることは私たちに課せられた命令でもある。しかし、義務感やプレッシャーから解放されて、パウロのように謙虚にしかし確信をもって福音に仕えたい。その元となるのは「私は罪びとのかしらである」とパウロが言ったように、私は神の前では無き等しい者であり、そのような私をもイエス・キリストが贖ってくださったという恵みを魂の底で知ることである。そうすればこの「キリストの測りがたい富」を他の人に伝えて共有することが素晴らしいことだと思うようになる。
- \*日本同盟基督教団のルーツは1891年、15名の宣教師が横浜に降り立った時から始まる。「スカンジナビア人宣教師の日本伝道事始め」(いのちのことば社)には初期の日本伝道の様子が実に細かく描写されていて、興味深い。彼らは、当時おもに「僻地」と言われた地で人々からののしられ、様々な迫害や苦難を受けながら日本の滅びゆく魂の救いのために、「キリストの測りがたい富」を伝えようと命がけで福音宣教をした。その結果、多くの実がなり今があるのである。「これは、...私たちの主イエス・キリストにおいて成し遂げられた神の永遠のご計画によることです。」(3:11)その神の計画とは、「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」(1テモテ2:4)今の小さな私たちの働きは、大きな永遠の神の計画の中に組み込まれている。